



共生の時代

'09
9月

●発行:グリーンコープ共同体的理事会 ●編集:共生の時代・編集部 ●〒812-8561 福岡市博多区博多駅中央街8番36号博多ビル7階 TEL092(481)7923 FAX092(481)7876

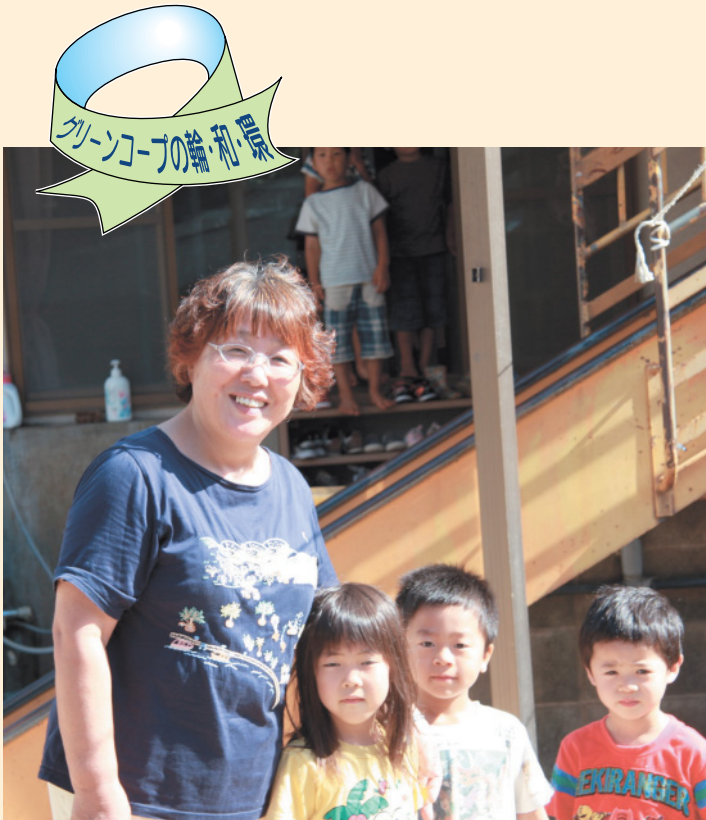
秋の強化月間 はじまる



Contents

ホームレス問題を考える 6	
人が再生する現場に関われるのは喜びです	2
うちのメーカー・うちの生産者 ㊸	
山芳製菓(株) ㊸厚切りポテトチップス	3
2009年度グリーンコープ地域運動交流集会	
ワーカーズの活力が風になって 地域に吹きわたる～深化するグリーンコープ運動～	4・5
グリーンコープ共生・平和長崎自転車隊	
今年もまた不戦の誓い新たに、走りぬく!	6・7
第14回青少年ネグロス体験ツアー	
自分自身を見つめ直せたネグロスとの出会い	8
酪農ホームステイ 行って!見て!たいけん綾! 岡山ふたみ牧場ファームステイ	
2009年子どもたちの夏	9
～グリーンコープのこだわり再発見～国産丸大豆醤油	
グリーンコープのすべての醤油の原料は「国産丸大豆」!	10
NO MOX! 危険なプルサーマルには、断固反対!	11

子どもたちとつくる日常の中に「感動の旅」がある



グリーンコープの輪 和 梨

熊本市で無認可保育園を営む
やまなみこども園 園長

山並 道枝 さん

1947年熊本市生まれ。1976年「やまなみこども園」開園。学習会や保育現場での多様な実践を試みながら、次世代を担う保育士の育成にも取り組む。3人の子供も(長男38歳、長女36歳、二女34歳)はそれぞれ独立、長女は中学校の音楽教諭。長男と二女は同園の保育士として勤務。熊本市在住。グリーンコープ生協くまもと組合員

プロフィール

「朝」 5時に起きて、夕方6時半まで休みなし。今の若か人はこぎやんこつあ、しきらん。無認可でやるなら、相当覚悟が要つてすよ。29歳の時、見学に訪れた山並さんに、ある無認可保育園の園長はこう助言した。それでも「お金もない、知恵もない、だけどポツケにや夢がある!」と踏み出した。「自分の手で保育畑を耕したい」という熱い思いがたぎっていた。義父の古いアパートを借りて小さな看板を掲げ、手作りの園児募集チラシを近所に配った。開園時は1歳から4歳までの子ども4人と、保育士2人だけのスタートとなった。ダンボール箱に布や千代紙を貼って手製の箱積木を作りながら「どうかもとたくさんの子どもたちが入園してくれますように」と毎日祈った。最初の4年間は自分の給料もままならず、「もはやめて勤めに出よう」と

何度思ったことか。しかし、子どもたちの顔を見ると「もうちょっとだけ頑張ってみよう」と、萎えかけた心が立ち直っていった。1970年代当時、時代は働く母親にとって逆風だった。制度そのものが未熟だから、行政に頼るばかりでは質の高い保育はできません。そこ(制度)から取りこぼされる親子に血の通ったやわらかな保育を実践できるのが、無認可園ならではのよさなんです。自身も3人の幼子に加え、母のない実兄の子ども2人も育てていた。お迎えの都合がつかない園児は、保育園の2階にある自宅で一緒に食卓を囲んだ。わが子もよその子もみんな一緒に育てた。保育園に通う子どもたちの家庭環境はさまざま。長期出張、帰宅時間が不規則な両親に代わり、半年間園児と寝食を共にしたこともある。時に親たちの人生相談にもなる。山並さんは多

くの親子を丸ごと受け止め、心身共に支えてきた。園は「駆け込み寺」、「遠くの親戚より近くの「やまなみ」とまで言われるようになった。14年前、台風で園舎が壊滅的な被害を受けた。運営が危ぶまれる中、「どうか「やまなみ」を閉めないで」と、園の存続を願う親たちが必死でカンパを集めてくれた。地元銀行の融資も叶い、ほど近い場所に移転して再スタートを切った。山並さんと親たちが心一つにして建てた園舎に今、園児140人、保育士20人の笑い声がこだまする。

「ここに「先生」はいません。大人と子どもが共に生活する毎日は「旅」に出るようなもの。いろんな体験、初めて出会う歌や絵の中にも「旅」がある。生活の中に「感動の旅」があるから、これまでやってこれたんです。輝く生命に寄り添って、山並さんの旅はこれからも続く。

小学3年生になった娘の担任の先生に「グリーンコープの活動をされているそうですね」と言われた。しかもその内容をよく存じだつたことにびっくり。どうも娘は学校で、先生や友だちに私のことを細かく話しているらしい。食品添加物や農薬、原発や戦争のこと、そして「生命を守るために私のお母さんは頑張っているんだよ」と誇らしげに話しているの聞いて嬉ししいやら恥ずかしいやら。こんな風に話した覚えはない。

送 信

かつたので本当に驚いた。この子が1歳の時に活動をはじめ、発見と驚きの連続であつたという間の8年。託児を嫌がり泣き叫んでいた娘も、今では小さな拡大スタッフ?と思うほどグリーンコープが大好き。この子たちの未来が希望に満ちあふれた世界であるように、心から願いつつ、できることは何でもしたいと改めて思う。

グリーンコープやまなみ生協理事長
松村 理津子

人が再生する現場に関われるのは喜びです

ホームレス問題を考える 6

“派遣切り、失業、解雇…。
仕事と住まい、
そして人の絆を失った
人々を支援したい!”
「抱樸館福岡」の開設を広く
社会に向けてアピール!!



青木康二さんの名刺には4つの肩書が記されている。筆頭は「NPO法人北九州ホームレス支援機構施設事業部長」。2番目が現在奔走中の「抱樸館福岡」準備室長だ。来春稼働予定の「抱樸館福岡」は80部屋を有する大規模な自立支援施設。九州で最もホームレス者が多いと言われている福岡市での支援に、それをどのように生かしていくのか、責任者として青木さんに課せられた使命、そして寄せられる期待は大きい。今号では準備に明け暮れる青木さんを紹介する。

「抱樸館福岡」準備室長

青木 康二 さん

故郷

郷は学齢期を過ぎ、今も両親が暮らす山口県光市だ。1972年生まれの37歳。まっすぐに伸びた若木の印象がある。「なぜホームレス支援をはじめたのか」。そう問われるたびに彼は来歴を次のように語ってきた。

地元の高校から早稲田大学に進み、卒業後は一旦一般企業に就職。しかし、どうしてもそれが生涯の職業とは思えず、2年半で離職。特別養護老人ホームでアルバイトをはじめた。その時たまたま統合失調症の患者家族と知りあい、何とか彼らの力になりたいと精神保健福祉士の資格をとる。やがて精神科の病院の相談員となり、そこで20年間入院していたある患者さんの相談にのるうち、彼がアパートを借りて暮らしたいと望んでいることを知る。そのため保証人を探さず、ホームレス支

援の一環として保証人バンクを立ち上げていた奥田知志さんと知りあい、北九州ホームレス支援機構と出会う。

ある日、公園での炊き出しに参加すると200人を超えるホームレス者が並んでいた。同じ地域にいながら、そうした現実があっても無関心だったと気付く。しばらくしてホームレス自立支援センターを開設するという話があり、スタッフに誘われた。精神科での相談員としての仕事は道半ばであったが、同じような志を持ち精神科で働く人は少なくなかった。一方、ホームレス支援に「仕事」として関わる人は、ほとんどいない。「やってみようか」と思った。

「最初から人助けをしようというのではなく、何となくこうなってしまうのです。より福祉的なものへ、より根源的なものへ吸い寄せられる

ように彼の感性は向かってしまっ、それは確かなことだった。

人間として向きあう

青木さんを福祉へ向かわせた要素はまだある。「バイオエシックス(生命倫理)」を大学のゼミでとった。バイオエシックスとは、アメリカの公民権運動、市民運動などを背景に発展してきた学問。人間の生命のはじまりをめぐる遺伝子操作の問題、生命の終末をめぐる終末期医療の問題など、課題は多岐に渡る。青木さん

は今でもホスピスを研究した。今こそインフォームドコンセントは当たり前だが、当時はがんを本人に告知するかどうかで世論は割れていた。ホスピスという言葉も正確に理解されたことはなかった。だが、新分野の学問は面白くはまり込んだ。

「パターナリズム(父親的温情主義)」という概念も知った。未熟な子どものために父親が進路を決めてやるということに興味する。患者に代わって医師が決定することもパターナリズム、インフォームドコンセントとは対極にある。同様に、普通の社会生活を送りたいと望んでいる統合失調症の患者の意を汲み取らず、病院にいる方が本人のためだと決めてかかるのもパターナリズム。精神科の病院で相談員をしていた時、青木さんがこ

だわったのはその点だった。青木さん自身にも似た経験があった。高校2年のとき父親ががんになった。患者である父、母、兄は知っていたが、

青木さんにだけは別の病名が告げられ、手術後、本当のことが知らされた。病名にも衝撃を受けたが、それにも増して自分だけ子ども扱いされたようでひどく悲しかった。今にして思えば、それがバイオエシックスを学ぶきっかけとなり、「家族(ホーム)」を考えることへとつながっているのかもしれない。

だから「本人の意思を尊重する」、その大切さは身に沁みている。ホームレス支援にもその姿勢は貫かれている。いつも、相手が誰であろうと対等な人間として向きあう。

人が再生する現場に関わる喜び

2003年にホームレス支援に携わるようになって、これまで1000人は下らないホームレス者と出会ってきた。膨大な数のホームレス者に対して支援する側の体力は依然小さい。一人ひとりに寄り添うというよりは「はい、次の人」というような関わりにならざるを得ない時がある。

また、過酷な環境に身を置くホームレス者は早く亡くなる傾向にあり、1カ月に何人も亡くなることもある。支援機構は「一人ひとりの人生の最後まで関わる」ことを使命としている。お葬式もそのたびに執り行われる。「それでも」と青木さんは言う。「人が再生する現場に関われるというのは喜びなのです」。

現在64歳の女性の話。月8万円の年金暮らしが立ち行かなくなり、死に場所を求めて下関から博多までやってきた。死にきれず博多で1年半野宿生活を送り、青木さんらに救済された。シェルターで暮らすこと3カ月、「やっぱり私生

きたいのだらうね」と笑みがこぼれる。現在64歳の男性の話。高架上で10年間ホームレスをしていた。「オレは独りもんやけん」が口癖だった。同様に救済されアパートに入居。最近携帯電話が欲しいと言ってきた。「いつでも青木さんに電話できるけんね」がその理由だった。生きることに何の望みも持たなかったホームレス者が、人の言葉の温かさに反応してわずかに身を起し、やがてそれを支えに立ち上がる。そして路上にいる仲間を助ける側に回ったりさえする。そのような人の再生の現場に関われることが何よりの喜びだ。

私たちの社会の成熟度が問われている


ホームレス者に対して社会の風当たりは強い。子どもたちによるホームレス襲撃事件も後を絶たない。未曾有の経済危機の中で、ホームレス者の人権など「自己責任」の論調にかき消される。支援機構には「なまじ支援するからホームレスが増える」といった容赦のない意見が届けられる。「ホームレス者は知的障がいを持っていたり、認知症、うつ、アルコール依存症などの精神疾患を抱えていたりすることが多いのです。また社会的・経済的な状況の影響も大きい。そうした事実を知ってほしい。仮に、ホームレスになったのが自己責任であったとしても、路上で息を引き取るといふ現実をそのままにしておくという社会でよいものでしょうか? 『ホームレスを好きでしているのでは?』とよく誤解されるが、これまで『野宿が楽しい』と言ったホームレス者に出会ったことはありません」。

8月3日、社会福祉法人グリーンコープは「生活困窮者のための自立支援施設『抱樸館福岡』開設」に向けた記者会見を実施。会場となったグリーンコープ連合会議室には、マスコミ関係者約30人(テレビ局3社、新聞社6社、通信社1社)が集まりました。社会福祉法人グリーンコープ副理事長奥田知志さん、「抱樸館福岡」準備室長青木康二さん、グリーンコープ福祉ワーカーズ・コレクティブ連合会理事長江島真弓さんが記者会見に臨みました。

社会福祉法人グリーンコープが「抱樸館福岡」の開設に至った経緯と目的、建物の概要、運営方針などについて、奥田さんが30分程説明し、その後、マスコミ各社からの質問の時間が40分間続きました。

「入居対象はホームレス者だけではなく仕事と住まいをなくした生活困窮者すべてであること」「社会福祉法人グリーンコープが行政の助成なしで4億5千万円を投入して建設する純然たる民間の善意の施設であること」「地域の人たちと共に生きていく拠点(ホーム)をめざしていること」「北九州ホームレス支援機構の20年の活動実績が生かされること」「『生命に寄り添う』というグリーンコープの理念が貫かれていること」など、「抱樸館福岡」が、これまでにない規模と内容の支援施設であることがマスコミをとおして広く伝えられていくこととなります。

うちのメーカー
 兵庫県朝来市
山芳製菓(株)



88

うちの生産者

厚切りポテトチップス



しっかりとジャガイモの味がして、パリッと香ばしく、食べた後止められない。ジャガイモがおいしい時期だけの限定品！**厚切りポテトチップス**。今年もカタログ GREEN 25号(8月31日配布)から登場。

製造メーカーの山芳製菓は東京に本社を置くスナック菓子メーカーだ。兵庫県にある関西工場を訪れ、工場長の坂本順さん、品質管理室係長の中井正憲さん、中四国九州営業所長の藤重健次郎さんに話を聞き、厚切りポテトチップスのおいしさの秘密、メーカーのこだわりに迫る！

厚切りポテトチップスのできるまで



冷蔵庫から送られてくるジャガイモの皮がピーラーでむかれる



人の手で腐れやキズのあるものを取り除き、芽を取り、適切な大きさに切り揃える。不良品ゼロを目標に真剣な作業が行われる。この工程がポテトチップスの品質に大きく影響する



スライサーでスライスする



スライスしたものを水洗いし余分なでんぷんを除く



フライヤーで揚げる(一定の温度で揚げるように温度センサーに常時気を配る)



焦げのあるポテトチップスをカラー選別機で取り除いた後、もう一度人の目で見て悪いものを取り除く



味をつける



袋詰めをし、できあがる



中井正憲さん

お菓子が大好きで、ここで働くことが喜び

山芳製菓は1951年に、先代の会長が鉱泉煎餅を製造したことからはじまる。戦後の貧しい時代に誰もが食えることができるお菓子を

を作ろうということからスタートした。「お客様の笑顔のために」、そのためには「作る人も笑顔で」。自己研鑽に励み、食べものは自然からの恵みであることを大切に作る。そこに作る人の笑顔が生まれる」というのが会社のモットーだ。

関西工場は姫路駅から1時間ほどの、中国山脈に囲まれた兵庫県朝来市にあるポテトチップスの専用工場。その工場は当時、グリーンコープのポテトチップス

を製造していた工場で、1992年で山芳製菓がそのままの形で譲り受けた。それがきっかけでグリーンコープとの取り引きがはじまった。ちょうどその頃グリーンコープではこだわりのポテトチップスの開発検討がすすまられていた。また、山芳製菓は生協関係の商品製造の経験があったことから、両者の取り引きはスムーズにすすみ、1994年、**厚切りポテトチップス**が開発された。



坂本順さん

こだわりの、味と食感

厚切りポテトチップスの厚さは2mm。その厚さが、ジャガイモの味を際立たせ、食べ応えを感じさせる。表面のギザギザは、一定の間で厚切りのジャガイモをカリッと揚げるため、表面積を増やす工夫だ。

は北海道のジャガイモのみを使用している。北海道のジャガイモの収穫は8月の終わりから10月ぐらいいまで。その8月の終わりから、**厚切りポテトチップス**の製造がはじまる。品種は、水分量やでんぷん量がポテトチップスに最適で、色が白く揚げやすいメークイン系の豊白(とよしろ)や男爵系の農林一号が主だ。ジャガイモの芽が出たり傷みやすくなる3月ぐらいで製造は終わる。また、長期に保存するとジャガイモのでんぷん値が上がって、揚げた時にポテトチップスの中ほどに黒くこげ輪ができてしまうことも、シーズンを限定されている理由のひとつだ。味や食感、品質が最適な時期のみ製造販売している。



藤重健次郎さん

母エキスをすることで、まろやかに。もちろん、塩分を摂り過ぎないように薄味だ。一般の製品は、濃い味付けをしているが、アミノ酸系調味料を使用し、強い塩分を感じさせない。そのため、気付かないうちに塩分を多量に摂ってしまう。

工場長の坂本さんは、「グリーンコープのものは味付けがシンプルだけに、工程では、塩とポテトチップ

おいしくて安心して安全なおやつ

藤重さん(中四国九州営業所長)は、「グリーンコープとの取り引きで特徴的なのは、何をどのように使うのか、どのように製造しているのかという確認の徹底です。それに応えることができているということは、メーカーとしての姿勢の評価にもつながります。大変ですけれど大切なことだと思います」と言う。

小さな子どもやお年寄りまで、手軽に食べるおやつに安心と安全は欠かせない。その代表的なスナック菓子がポテトチップスだ。旬を満載した**厚切りポテトチップス**は、グリーンコープのこだわりおやつの一つ。山芳製菓では、徹底した衛生管理のもとに、愛情を持って製品作りをしている。

地域に吹きわたる

～深化するグリーンユープ運動～

地域の組合員とワーカーズが出会う場として、2005年にスタートした地域運動交流集會も5回目となります。2009年度は7月21日に福岡市で開催され、組合員311人、ワーカーズ363人、職員73人、来賓9人(グリーンクラブ、縁をつむぐ会)計756人が一堂に会しました。

今回は、同業種間のワーカーズ同士がコミュニケーションを深めるための交流会を持つ新たな試みもあり、さらにワーカーズ間の連帯が深まる集會となりました。

実行委員長挨拶



グリーンユープ共同体 代表理事 田中 裕子さん

2004年のグリーンユープ福祉連帯基金の発展的解散後、福祉の取り組みをグリーンユープ全体で共有していくために、2005年にスタートした地域運動交流集會も5回目を迎えました。組合員とワーカーズの交流の場からワーカーズ同士の交流へと進化しています。その地域版の交流集會も各単協でも開催されるようになってきており、グリーンユープ運動の広がりを実感できるようになりました。この集會は、福祉の取り組みの共有化からはじまり、今では地域運動の共有化へと発展してきています。取り組みの成果と経過を共有していく場となっています。ワーカーズ運動を広めていくことは、グリーンユープの地域運動の深化につながっていくと思います。

今日参加した組合員とワーカーズが出会い、グリーンユープ運動の素晴らしさを実感し、明日からの活動の活力としていきましょ。

単協報告 グリーンユープ生協ふくおか



グリーンユープ生協ふくおか 理事長 田原 幸子さん

これからの店舗をすすめていくために

現在ふくおかの店舗は21店舗、働くワーカーは約340人。店舗組合員数約4600人、そのうち1カ月に1回以上利用している組合員は約11000人です。登録していても利用が低い現状や店舗をめぐるさまざまな課題を出しあい、解決に向けて店舗政策をまとめました。

グリーンユープ商品を利用する形態として共同購入と店舗があります。店舗は

社会福祉法人グリーンユープ

NPO法人北九州ホームレス支援機構

谷本 仰さん

1988年の冬、数人のボランティアでおにぎり20人分の配布からスタートしたホームレス支援も21年目を迎えました。おにぎりを手渡ししながら他に困った人はいないか尋ねて、次の人に届けるという活動がはじまりました。

ホームレス者は住所がないので生活保護の対象にはなりません。そこで、まず住むところを確保し、生活保護を受けられるようにするための支援をはじめ

単協報告 グリーンユープ生協みやざき



グリーンユープ生協みやざき 理事長 杉尾 紀美子さん

福祉活動組合員基金 (100円基金) 報告

みやざきでは、2004年から検討をスタートした「100円基金」が5年越しでようやく実現しました。

その間、福祉委員会の立ち上げ、子育てサポートワーカーズの設立、福祉委員会や「100円基金」・ワーカーズの情報盛り込んだ地域福祉活動ニュース「夢ヲかたちに通信」の定期的な発行などを行っ

ホームレスの人たちを放つておかない地域を創ることにあると思います。

「抱樸館福岡」準備室長 青木 康二さん

昨年「抱樸館福岡建設計画」挫折後、準備室で巡回相談事業をはじめました。一般的に社会福祉の対象は、子ども、高齢者、障がい者であって、家がない人は対象外です。巡回で厳しい状況下にあるホームレスの人たちと出会います。まずは、その人たちの生命を守り、自立できるように支援する

生活再生事業の報告

2006年ふくおかでスタートした生活再生事業は、2008年くまもと、おおいだ、やまぐち、2009年は(長崎)へと広がっています。相談室はふくおかの福岡、北九州、筑豊、筑後地区を中心に合わせて7つ、21人の相談員が活動しています。電話相談6795件、面談3539件、貸付337件、貸付額2億7千万円の事業となっています。



下関市内にある店舗「C O E X」の2階「せき」の2階



大分市郊外のラポール館の4階に生活再生相談室を開設し、3人の相談員で相談に応じています。協力してくれる法律家も7人います。相談者は初め、相談の電話を入れるかどうかで葛藤するようですが、相談の中で自分の状況を確認してもらうことで初めて解決に向かえると感じています。「相談したこと家族が向きあえるようになった」という相談者の声に喜びを感じています。穏やかな気持ちで相談できるような対応を心がけていきたいと思っています。



抱樸館福岡の完成予想図

2009年度グリーンコープ地域運動交流集会

ワーカーズの活力が風になって



手あそびうたで会場を盛り上げる子育てサポートワーカーズの皆さん



福祉ワーカーズ連合会 理事長 江島 真弓さん

まとめ

「グリーンコープ運動の広がりの共有と組合員とワーカーズの交流の更なる深化をめざす」という今回の集会の目的は十分に果たせたと思います。組合員とワーカーズの参加人数はほぼ同数です。ワーカーズ運動の広がりを実感します。

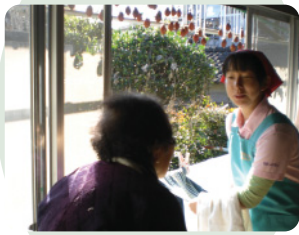
今日の報告を聞いて、グリーンコープ運動の素晴らしさを改めて確認することができました。「私一人が幸せでも意味がない。」

「グリーンコープ運動の広がりの共有と組合員とワーカーズの交流の更なる深化をめざす」という今回の集会の目的は十分に果たせたと思います。組合員とワーカーズの参加人数はほぼ同数です。ワーカーズ運動の広がりを実感します。

今後は、ここに集うすべてのワーカーズで大きな連帯を築いていきたいと考えています。

福祉関係ワーカーズ

訪問介護サービス



「困った時はお互いさま」の気持ちで、支援に取り組んでいる

小規模多機能ホーム



「住んでいる地域で老いていく」ことができるようにその人の人生に寄り添っていきたい

グリーンコープの福祉関係ワーカーズには現在、77グループ、約2500人のワーカーが活動している。各分野が連携し、利用者の「ありがとう」の言葉に励まされ、学びながら日々の活動に邁進している。

福祉用品店舗



「笑顔と親切・ていねい」をモットーに気軽に来店していただけるように努めている

「悩むよりはまずでんわ!」と気軽に相談できる窓口として福祉情報を提供。

ふくし情報でんわ

ケアマネージャー

利用者がその人らしく生きられるように高齢者の自立した気持ちを大切にしている。「年をとるのも悪くない」とみんなが思える社会をめざしたい。

・ケアマネージャー、情報でんわ等の一部はワーカーズではないところもあります

食事サービス



お弁当作りを通して地域や自宅での暮らしを応援

デイサービス



利用者一人ひとりの気持ちに寄り添いながらお手伝い

共同購入ワーカーズ



グリーンコープの各地域で20グループ約600人のワーカーが活動。おおいでは2008年4つのワーカーズが合併し各支部との連携を強化している。ふくおかではワーカーズ間の交流の場が充実してきている。くまもとは7ステーション93人で企業組合を結成して4年、グリーンコープと連帯し、配送から組合員拡大まで一連の流れを総合的に受託しようとしている。

家計とくらしの応援活動円縁

2008年5月オールグリーンコープのワーカーズとして発足、2009年度は新しいメンバーも加わり、14人で活動。2008年度は家計簿クラブ(組合員の自主サークル)62カ所のサポート、組合員学習会26カ所、共済学習会7カ所など実施。お金の面から生き方・暮らし方を捉えなおす活動をしている。子どもの「金銭教育」や大人向けライフプラン講座、保障の見直しなどの学習会にも取り組んでいる。



子育てサポートワーカーズ

生協の組合員活動時の託児や個人依頼の託児、幼稚園の送迎などで子育てを応援している。2008年度は子育てワーカーズの今後を考えるために「子育て未来プロジェクト」を立ち上げ、視察などを実施、これから何がしたいか答申にまとめた。このようにして自身も成長していきたい。

代理人運動

ふくおかネットワーク くまもと生活者ネットワーク

日頃の暮らしの中で、「こうだったらいいな」、「困ったな」を政治に反映していくために議会に代理人を送ることからネットワーク運動ははじまった。1989年に福岡県那珂川町に代理人を出してから20年になる。1995年には熊本県八代市にも代理人が誕生した。「住んでいる街を住みたい街に」、安心して暮らしたい街にするために、各地で代理人(ネット議員)が活躍している。現在、暮らしの安心や人と人とのつながりが絶たれるような社会状況となっている。地域の市民活動が政治を社会を変えていく力を持っている。生協、ワーカーズ、NPO法人と共に代理人運動を広げていきたい。

食品店舗ワーカーズ



グリーンコープの店舗にはグリーンコープの商品が勢ぞろいしている

グリーンコープエリアで32店舗を約500人のワーカーが担い、事業高は約54億円に。グリーンコープ運動を地域に発信する拠点となっている。やまぐち、おおい、ふくおか、かごしま、くまもと各店舗からそれぞれの日頃の特徴的な活動が報告された。

我の誓い新たに、走りぬく!



8月8～9日、125kmを走りぬく中学生を中心にした65人の銀輪隊、無名舎・こどもの家の子どもたち、小学生や大人の自転車隊96人、応援をする組合員や全体を支えるスタッフ、総勢約450人の人々が、不戦への熱い思いを胸に、長崎に向かいました。

この2日間に体感した貴重な経験を胸に、「平和の尊さ」「不戦への思い」を爆心地の平和公園での「平和のつどい」で確認し、原爆の犠牲になった人々の冥福を祈りました。



七浦小学校校庭で記念撮影



▲みんなの応援を受けながら出発



▲朝日を受けて大川橋を渡る



▲七浦小学校を出発して、1日目の最大の難所、長い坂道



▲休憩の森林公園でグリーンコープ生協さがをはじめとする応援隊の出迎えを受ける



▲9日の早朝、最大の難所日見峠を応援を受けながら登る



▲長崎市公会堂の前の交差点を、3列の隊列を組んで161人が右折する

出発にあたって

2009年4月、アメリカ合衆国オバマ大統領がプラハにおいて、アメリカは核兵器を使ったことがある唯一の核保有国として、核兵器のない世界平和と安全保障追求を約束するという主旨の表明を行いました。これまで、誰もが戦争や核兵器の開発保有を否定してきましたが、理想論として押しやられてしまうのが現実です。しかし、オバマ大統領の宣言は、この現実を踏まえた上での発言として、私は「評価」できると思います。

私たちは今から、「共生・平和長崎自転車隊」として、「原爆の地・長崎へ!」と「不戦」のゼッケンを付けて64年前原子爆弾が投下された長崎に向かいます。真夏の暑さの中、「自分の力で頑張る」「頑張る人を応援する」「仲間同士助けあう」。助ける自分に感動し、助けてくれる仲間や応援してくれる人々に感謝します。この2日間は、人間の純粋な素晴らしさを実感して生きることが出来る2日間です。そして、「生命と平和が絶対に大切であり絶対に守る」「人を殺すことはいけない」ことを確信し、人々に呼びかけながら長崎に向かいます。

この2日間を支えてくれる多くの人に感謝しながら生命を大切に元気に走りましょう。走り終えた後は、今よりもっと「平和への願い」を強く持ち、これまで以上に「平和」を大切にしていってスタートにしましょう。

生活協同組合連合会グリーンコープ連合専務理事 片岡 宏明

グリーンコープ共同組織委員会主催 2009年度第1回平和学習会・5/28福岡市

いのち 生命に寄り添って

長崎自転車隊のはじまりから

「共生・平和長崎自転車隊」の取り組みに向けた平和学習会が開催されました。自転車隊の発信地である託児所「無名舎・こどもの家」(旧「無名舎」)の津村佐喜子さん、加藤裕子さんによる講演要旨を紹介いたします。



津村佐喜子さん



加藤裕子さん

※1972年グリーンコープ連合初代会長故武田桂二郎が託児所として自宅を開放したのは始まり。現在は、「小学生教室」、中高生の学習室「共生学館」、デイサービスセンター「共生つどいの家」を併設。子どもからお年寄りまでが共に集う地域の居場所となっている。

無名舎・こどもの家(柳下村塾)の歩み

赤ちゃんから就学前までの子どもたちを地域の人と一緒に育てていこうとつくった「柳下村塾託児所」。それは、教育とは何かを問うと同時に、「親と子」、「男と女」、「障がい者と健常者」の関係を問い直していこうという運動でもありました。そこはやがて、赤ちゃんからお年寄り、みんなが過ごせる場所となり、地域の人々と共に子どもたちの今と未来を見つめていく託児所となっていきました。

1970年代、農業や食品添加物のことが話題になる中で、疲れやすく、すぐに身体がふにやんとなってしまう子どもたち。心と身体のおちがつかないと感じていました。1977年、託児所の子どもたちに無農薬・無添加の食べものを食べさせたいとの思いから、当時の保母と母親らで「たべもの共同会」をつくりました。それがやがて、共生クラブ生協そしてグリーンコープへと引き継がれていきました。

「生命」への思い―生命の不思議

生命は、はかりしれない不思議に満ちています。一つの生命は、700万個からわずかに500個に選ばれた卵子と、3億個のうちたった一つだけの精子との出会いからはじまります。そうして誕生した胎児は、母親の胎内でわずか1週間のうちに35億年分の人間の進化の歴史を再現した後、40週かけて誕生の時を迎えます。狭い産道を空息寸前で通り抜け、「おきや」と生まれてくる赤ちゃん。生まれたからには生きていかなければなりません。子どもたちは、泣いたり、怒ったり、喧嘩したり、すねたり、こねたり、一人ひとり違いながらも、みんな懸命に「生きてるぞー」という自己表現をしています。その生命が理不尽に傷つけられたり、奪われたりするとは絶対にあつてはならない。そういった日々の思いや平和への願いが爆心地へ向かう長崎サイクリングの原点にあります。

不断つくる日常の先に「長崎」がある

赤ちゃんが生まれると「寝返りしたよ」「ハイハイしたよ」とみんな喜び、子どもたちも周囲から見守られ、喜ばれながら遊び、成長していきます。託児所の子どもたちは、毎日の外遊び、週2回の野外活動の中で、リヤカー部隊、徒歩隊、補助輪付き自転車と活動範囲を広げます。やがて自転車に乗れるようになると、小学生と一緒に



第13回 ピョンファ・エ・ダリ(平和の橋) 韓国への旅 7/25~7/27

「ピョンファ・エ・ダリ韓国への旅」は、過去の日本の侵略の歴史を正しく知ることから「グリーンコープの平和」について再認識すると共に、韓国のハンサリム生協とドゥレコープとの交流をとおして未来に向かって連帯を模索することを目的としています。今回で13回目を迎えた取り組みについて、参加メンバーが見聞きしたこと、体験したこと、またそれを通じて感じたことを報告します。

歴史を学び、語り継ぐことで新しい歴史をつくる

「旅」では、日韓の歴史を知るためにいくつかの施設の見学をしました。三・一独立運動の拠点・独立記念館には、広大な敷地に展示館などたくさんあり、かつての日本軍の数々の残虐な行爲とそれに対抗して民衆が命を懸けた闘争のようすが展示されています。国民からのたくさんの寄付・寄贈で建設され

グリーンコープ共同組織委員長 大橋 由美子

たこのこと。ソウルの西大門刑務所歴史館には、植民地時代の獄舎もあり、投獄された人々の息遣いを感じるほどでした。ソウル市民の憩いの場であるナナムの家は、1919年3月1日午後2時に独立宣言が朗読された地です。日本の県にあたるソウルの道での独立運動のようすを表現したレリーフ

群があります。景福宮は朝鮮王朝の王宮で、美しく裝飾された歴史ある建物が続いている、そのように素晴らしい文化を持ち、誇り高く存在していた朝鮮民族がかつての日本がどんなに踏みこたかを知りました。

「旅」の中でもっとも心を揺り動かされたのは、日本軍「慰安婦」歴史館の見学とナナムの家の訪問です。ナナムの家は「慰安婦」だったハルモニ(おばあさんの意)の8人が共に暮らしている場です。日本に暮らしたこともあるボランティアの朴さん一家が通訳をし

てくれました。想像を絶する過酷な人生を歩んでこられたハルモニたちの手は驚くほどに柔らかく温かいものでしたが、別れ際の「必ず私たちがのことをたくさんの人に伝えてください」との言葉は全身全霊の思いを込めた強いものでした。歴史館にはハルモニたちの絵や、すでにじくなった人々の遺品もありました。



今年もまた不戦

グリーンコープ共生・平和長崎自転車隊
第17回共生・平和銀輪隊
第22回共生・平和自転車隊

平和へのアピール

1945年8月9日、原爆が落とされ多くの尊い生命が一瞬にして奪われました。僕たちの心にずっと残る悲しい歴史の一つです。僕たちは一人ひとり生命をもっと大事にしたいと思いながら走りぬきました。これからの、世界中の人々の平和を願って、不戦を訴えていきたいと思っています



銀輪隊代表
グリーンコープ生協さが野田 悠貴(中3)



自転車隊代表 無名舎・こどもの家 古賀 理(小5)



自転車隊代表 無名舎・こどもの家 辻 優吾(小5)

戦争があつてはいけません。世界中から武器も兵隊も戦争もなくなればいいと思います

無名舎に入る前、平和や戦争について考えたことはなかったけれど、今は考えるようになりました。不戦のゼッケンをつけて走ることは大切なことだから、ぼくは走り続けていきたいと思



平和のつどいでのであいさつ

グリーンコープ共同代表理事 田中 裕子

6年前にはわが子が銀輪隊に参加、例年は森林公園での応援や鹿島駅での出迎えに参加してきましたが、今回はグリーンコープ共同代表理事としてはじめて参加しています。7日からの3日間、感動でいっぱい。スタッフの事前の準備、点検、綿密な打ち合わせなど万全を期した対策、これがグリーンコープの平和と共生を支える根幹にあると感じました。参加者全員で感謝しましょう。

今を生きる私たちが、この取り組みをとおして、「生命」と向きあう真摯な姿勢を体感し、人は決して一人ではない、多くの人に支えられて生かされていることを、大人たちから子どもたちに伝えたいと思います。そして自分の生命と同様に他の人の生命も大切にすることを忘れなければ、「平和」は守られていくはず。

酷暑の中、仲間同士励ましあい、応援の声に支えられ頑張ってきた2日間を心に刻んで、これから生きて欲しいと思います。



▲原爆慰霊碑に折り鶴を奉納



▲11時2分、黙とう

人類はどこに行くのか

今も地球上のいろんなところで内戦や戦争が起きています。地球環境の先行きも不安です。仲間同士の争いの過程で、牙や角が限りなく大きくなって、結果的に身動きがとれずに絶滅してしまつたマムシやオオツノヘラジカ。反対に、ミツバチや蟻のように、仲間と共生共同して生活する動物は、古代からそのままの姿で生き延びている。こうした動物の種の歴史は、人類がすすむべき方向を指し示してくれるような気がするのです。

に夏季特別活動に参加します。夏休みの40日間、毎日25kmの道のりを自転車車で往復し、水泳、サッカー、ドッジボールで汗を流して遊びます。その中で体力と持久力を培うのです。生命を大切にするというグリーンコープの基本方針は、子どもたちが自転車走を身につけていく行程の、周囲のかかわりの中に体現されます。大人は暑い日も、寒い日も、子どもに手を添えて、何度も辛抱強く一緒に走ることを繰り返します。自転車隊列を組んで走ることは、人間関係を大切にしなければできないし、危ないからと挑戦しなければ、かえって大きな怪我に結びつきます。小さな怪我をしながらの経験が、注意力を培い、やがて大きな怪我を避けていく力に結びつきます。生前、武田さんは常日頃から子どもたちの安全を守るため、念入りの計画を立て、厳しく守りを守らせていました。子どもたちには繰り返して、人を殺さない、殺されない！と訴えていました。その遺志は長崎サイクリングへとつながっています。

くついでいくことの大切さが実感できました。この「旅」を通じて感じたのは、どこに行っても親子連れの見学者が多く、親子連れの子どもたちが説明していたことです。韓国の人々が、歴史を忘れず歴史に学び語り継いでいくことが大切だと考えていることが分かりました。また、重い歴史を乗り越えて、日本の私たちと手をつないでくれる皆さんの方々とお会いした旅でもありました。この取り組みを、未来をつくる新しい歴史にしていきたいと思っています。

2009年夏 第14回青少年ネグロス体験ツアー 7月25日~8月1日

自分自身を見つめ直せた ネグロスとの出会い

グリーンコープのすべての取り組みには四つの共生(自然と人・南と北・女と男・人と人)の理念が貫かれています。青少年ネグロス体験ツアーは、その中の「南と北の共生」の取り組みの二環として、1991年から始まりました。14回目となる青少年ネグロス体験ツアーに、7人(ふくおか3人、ひろしま3人、やまぐち1人)の子どもたちが参加しました。



BGA(バラゴンバナナ生産者協会) 総会後にみんなで記念撮影

私が今回の青少年ネグロス体験ツアーに参加して一番驚いたのは、ネグロスで出会った人々の多くが活力にあふれていたことです。彼らは、初めて出会った時から私たちにハイテンションかつフレンドリーに話しかけてきてくれました。私たちが彼らのテンションの高さに戸惑い、どう接していいのかわからず、とりあえず受動的に必要最低限の反応を返していたにもかかわらず、です。

活力にあふれたネグロスの人々

グリーンコープやまぐち生協 植田 太陽さん(高3)

ロスで出会った多くの人々が、私たちに笑顔を見せ、友好的に接してくれてくれたのには本当に驚きました。もし日本人とネグロスの人々の立場が逆で、ネグロスの人々が日本で開催されるツアーに参加するために来日していたら、ツアー関係者以外の日本人の多くが彼らに向けるのは、笑顔などではなく、好奇の視線か、興味がないと書いてある無表情な顔のどちらかでしょう！

顔にあふれていました。日本には、学校生活をつまらなく感じ、日常に流されるままになんとなく学校に通っている学生が大勢います。しかし、ネグロスの人々はお世辞にも裕福とは言えず、奨学金で学校に通っている人や、授業料が工面できずに学校に通えない人なんかも大勢います。そんな境遇の人々でさえ、私たちにいつも笑顔を見せてくれ、活力にあふれているのを感じることができました。いつも元気で、物事を少しでもよくしようという姿勢で毎日を生きているネグロスの人々。世の中の大勢の日本人に、彼らを見習って欲しいと、私は思いました。



ネグロス最後の夜、お別れパーティで仮装を楽しむ子どもたち

ネグロスの友だちに教わったたくさんしたこと

グリーンコープ生協ひろしま 姫宮 彩さん(高1)

用意してくれていた創作劇を見せてもらい、フィリピンの歴史や日本との関係を知ることができました。4、5日目には私たちがわり、ネグロスの友だちと一緒に劇を練習しました。初めは恥ずかしかったけれど、自然とできるようになり、みんなと一つになれた気がします。一人ひとりのこれまでの人生を語りあう時は、泣きながら苦しかったことを話す子もいれば、すごく親に感謝していると話す子もいました。みんな泣きながら話を聴きあいました。

6日目にはたくさんの方の前で劇の発表。緊張しながらも大成功に終わり、達成感が得られました。そして、兼重さんのお墓参りをして、いろいろ

ネグロスで撮ってきた写真を見ながら、まるで魔法にかかっていたような一週間を思い返しています。ネグロスツアー4日目、その日は「人生の木」というワークショップを通して、お互いの趣味や家族のことなど、深く知りあうことができました。その後、キャンプを囲んでこれまでの人生を振り返り、これからどのように生きていきたいかを語りあいました。一人ひとりいろいろな家庭や境遇の中で今日までを過ごし、辛い話もたくさんありました。そのような話を、出会うたびに聞いてきました。何のためらいもなく話しあえたことは、今思えば不思議です。相手と真剣に向きあうことで、いつの間にか自分自身を見つめていました。

ネグロスでの1週間は私の心を照らし続ける

グリーンコープ生協ふくおか 米倉 幸子さん(高2)

そして、全員が話し終えた時には涙があふれ出しました。日本で友だちにももちろん、家族にも話せないような心の底にあるものを語りあえた私たちは、家族以上の存在のような真の絆で結ばれたと思います。ネグロスツアーに参加して、偶然出会った私たち。この出会いは、これからの人生を豊かにしてくれるでしょう。忙しすぎて、時間と周りに流されて何となく過ぎていく日本の生活。そんな日々から飛び出して、ネグロスで過ごした1週間はまるであの日回んだキャンドルの灯のように暖かく、そっと私の心を照らし続けています。「おはよう」と家族と笑いあえること、ご飯がおいしいこと、学校に行けること、そんな当たり前にな

ってしまっている幸せの存在を改めて今、感じています。そして今日からまた起こり得るいろいろな人々との偶然の出会いを大切にしたいと思っています。

カネシゲパークにある、故グリーンコープ連合専務理事兼重さんの墓前に手を合わせる。兼重さんはネグロスバナナの民衆交易に尽力した



酪農ホームステイ 7月21日~23日

グリーンコープ組合員の子どもたち
47人がびん牛乳の生産者宅に泊まって、
乳牛の世話を体験しました



酪農ホームステイに行っ
て心に残ったことは、牛舎
で一ばん小さい子牛にミル
クをやったことと、牛さん
のお乳からつくった牛乳を
飲んだことでした。牛乳は
ものすごく甘くて、おいしく、
家で飲む牛乳と少しちがう
ように感じました。
ミルクをやった時、子牛
がすごい力ですいついて、
ものすごい速さでミルクが
なくなりました。でも、こ
の子牛のお母さんはこの子

子牛はすごい速さで ミルクを飲んだ

グリーンコープ生協くまもと
もとか
手島 百与佳さん (小5)



牛をうんだあとに、力つき
て死んだそうです。
ハブニングもありました。
牛のふんかきの時、牛さん
のうしろに立ったのでびつ
くりさせ、けられました。
幸いにふんかきのぼうにあ
たりましたが、牛さんには
かわいそうなことをしたな
あと思っています。
ホームステイ終了後に修
了証をもらったときはうれ
しかったです。

ぼくがホームステイした
のは右田牧場でした。
牛舎は広くて牛が40頭
ぐらいいました。大きなせ
ん風機が5つあって、牛が
暑がりなので、夜以外はず
っとまわっていました。
ぼくがやった仕事は、牛
の赤ちゃんにミルクをやっ
たり、フン落しをしまし
た。ポールいっぱい分のミ
ルクをいそいでのもうとし
て顔をおしつけるからやり
にくかったです。フン落し
をしてそのフンをシャベ
ルでみぞの中に入れました。
とてもくさくてたまりませ
んでした。でも右田さんは、
それを毎日やっているのだ
えらいと思いました。ち

牛よ、ありがとう!!

グリーンコープ生協 (長崎)
徳永 翼さん (小5)



ホームステイしている家の子ども
たちとも仲良し!

しほりもやりました。なか
なか出てきませんでした。
グリーンコープの牛にゆうは、
右田さんの家族が一生けん
めい牛のせわをしてくれる
おかげで毎週ぼくの家に届
けられるということがわか
りました。
右田さんありがとうござ
いしました。これからもたく
さんの牛にゆうをのんでし
ん長180cmをめざします。



勢いよくミルクを飲む子牛におっかなびっくり

2009年

子どもたちの夏

夏休み、グリーンコープの子どもたちが行く毎年恒例の農場体験。今年も
熊本県菊池地域の「酪農ホームステイ」、中国地方の「岡山ふたみ牧場ファ
ームステイ」、南九州の「行って!見て!たいけん綾!!」、それぞれの取り
組みに参加した子どもたちが、生産者と交流しました。子どもたちは慣れない
牛の世話や野菜の収穫に大奮闘!あらためて食の大切さや命の重さを感じ
た貴重な体験をしました。子どもたちの感想を紹介します。

岡山ふたみ牧場 ファームステイ

7月18日~19日

産直国産牛の生産者を、中国地
方の子どもたち15人が訪れ、牛
の世話などを体験しました



楽しかった ファームステイ

グリーンコープ生協おかやま
藤村 咲南さん (小5)



7月18・19日の2日間、
ふたみ牧場へ行きました。
とても楽しい2日間でし
たが、とくに楽しかったのは、
子牛のミルクやりです。
子牛がミルクを飲む時バ
ケツで飲むのにびっくりし
ました。なぜかと言うと一
度に3リットルの大量の
ミルクを、舌をしようずに
使って飲んでいたので、私
がミルクをあげると、と
っても喜んでいたのでかわ
いいなと思いました。
その後、ざつ草を取りま
した。取ったざつ草がいっ
ぱいになると、牛にあげれ
ます。ざつ草をあげている
と、牛が急いで食べようと
してバケツの中に鼻をつ

農家の人の苦勞が わかったごぼう掘り

グリーンコープかごしま生協

新栢 宏美さん (小6)

私は、家族で綾ツアーに
参加しました。ツアーでは、
豚の飼料工場やお酢を作っ
ているところ、エリンギの
収穫やごぼう掘りを体験し
ました。その中で一番おも
しろかったのはごぼう掘り
です。ごぼうが畑に植わっ
ているところを私は初めて
見ました。また細長いごぼ
うを引き抜くのは難しいだ
ろうなと思うことができたの
に引き抜くことができました。
このツアーに参加して、
農家の人の大変さがよくわ



エリンギの収穫もはじめて体験

行って!見て! たいけん綾!!

7月18日

かごしま・みやざきの組合員17
家族62人が宮崎県綾町の生産者
と交流し、農業体験をしました



「ごぼうの収穫、楽しかった!」

楽しかった しゅうかきたいけん

グリーンコープ生協みやざき

長尾 由貴さん (小4)

7月18日、「第5回行っ
て!見て!たいけん綾!!」
にお母さんとさんかしまし
た。
しゅうかきたいけんをし
ました。エリンギとごぼう
のしゅうかきをしました。
エリンギは、土にはえてい
ると思ったけど、プラスチ
ックのポットにさいばいさ
れていたのがいでした。
ようきが数えきれないぐら
いならんでいたで、びつ
くりしました。ごぼうぬき
は、いっぱいぬけておもし
ろかったです。
りようさいかいのみなさ
んが作ってくださった野菜
でパーベキューをしました。
黒ずドリノクもいただきま
した。おいしかったです。
めったに見られないごぼ
うの種や初めてのしゅうか
きたいけんやわかりやすい
紙しばいなどがあって楽し
い思い出になりました。来
年も行きたいです。



国産丸大豆醤油



国産大豆にこだわるのが日本の農業を守ることにつながります。

グリーンコープのすべての醤油の

原料は「国産丸大豆」!

醤油は、日本の食文化の中心的存在です。だからこそ、グリーンコープはその原料や製造方法にこだわってきました。製造方法はもちろん「本醸造」。そして20年来追求してきた原料大豆の国産化がこの秋から実現。カタログGREEN23号(めちくごは33号)から登場しています。大豆の自給率が5%という状況の中で、国産大豆への全面切り替えは画期的なことです。グリーンコープの徹底したこだわりにズームします。

製造工程と原料へのこだわり

醤油の原料は大豆・小麦・塩、それを麹菌の力で発酵させるだけ、材料も工程も至ってシンプル。だからこそ、グリーンコープは原料にも製造工程にもこだわってきました。技術の近代化によって短期間で製造できる醤油もさまざまに開発されましたが、グリーンコープは、古来より引き継がれてきた「本醸造」にこだわり、麹菌の働きによって熟成される旨味とコクを守ってきました。

原料の小麦はもちろん国産です。しかし、大豆の自給率が5%程しかない原料大豆の国産化は、なかなか難しいものでした。その中でもせめて、どこで栽培されたものなのかという原産国にこだわり続けました。そして遺伝子組み換え大豆が問題になった1996年には、non-GM大豆であることを追求。結果、産地指定のアメリカ産とカナダ産のnon-GM大豆を採用しました。その時も、国産大豆の使用を検討しました。しかし、価格が高く、しかも確保が難しかったため、国産大豆への切り替えを断念しました。

2000年には、原料の脱脂大豆を丸大豆に切り替えました。それまでグリーンコープでは、2つのアイテムを除き、non-GMの脱脂大豆が使われていました。丸大豆を使う醤油作りには、製造中に出る油の処理など高い技術力が必要です。すでに丸大豆を使っていた醤油メーカー2社のうち、熊本にある松合食品は他の醤油メーカーに講習に出かけた。その後2008年の中

国産丸大豆への全面切り替え

国産丸大豆への全面切り替え

この秋、やっと国産丸大豆醤油ができあがりました。なお、「ちくご醤油」は33号から切り替わります。

この秋、やっと国産丸大豆醤油ができあがりました。なお、「ちくご醤油」は33号から切り替わります。

醤油の歴史

醤油は、時間をかけて発酵・熟成させることでコクと旨味を醸し出す、日本を代表する発酵食品のひとつです。日本各地にはそれぞれ特徴的な味と風味を持つ醤油が食され、それが地方独特の食文化に大きく影響していると言えます。醤油はいつ頃から私たちの食卓に登場してきたのでしょうか。

醤油のはじまりは中国の「醬(ジャン)」

醤油は、紀元前8世紀頃の中国で製造されていた「醬=ジャン」に由来しているという説があります。「醬」とは、もともと食品を塩漬したものという意味で、果実や野菜、海藻などを材料にしたものを「草醬」、魚を使うと「魚醬」、肉の場合は「肉醬」などがあります。その中で、米や小麦、大豆を原料にした「穀醬」が醤油の原型だと言われています。ちなみに、「醬」は日本では「ひしお」と呼ばれています。

日本の醤油の歴史

日本で実際に醤油が使われようになったのは、13世紀に金山寺味噌の製造過程で出る「溜り」が調味料として使われ、それが「たまり醤油」となって、今の醤油につながったと言われています。現在のように一般の家庭でも使われるようになったのは室町時代に入ってから。江戸時代になると野田や銚子などで多く醸造されるようになりました。その後大正、昭和にかけて、近代工業化が確立。防腐剤の使用、コンクリート製のタンクの登場、脱脂大豆の加工技術がすすめられるなど変化していきました。さらに、大戦後の経済復興と人口増加に伴い、醤油の生産技術はすすみ、生産量も高まってきました。新式醸造のアミノ酸醤油も作られるようになりました。

丸大豆から脱脂加工大豆へ

古来の醤油には、丸大豆が使われていました。しかし、丸大豆には大量の油が含まれており、醤油を搾る際、その油をていねいに取り除かなければなりません。その手間を省くために、脱脂加工大豆が開発されたのです。醸造の機械化と効率化によって、醤油業界では、あらかじめ大豆油を搾った後の脱脂加工大豆を原料とすることが常識となっています。今でも市場では、9割以上が外国産大豆で、さらにその85%に脱脂大豆が使われています。

NO MOX! 危険なプルサーマルには、断固反対!



玄海原子力発電所

今年5月23日、フランスで製造されたMOX燃料(プルトニウムとウランの混合物)が、佐賀県玄海町の九州電力玄海原発に搬入、11月中にも、同原発3号機でプルサーマルによる発電を開始する計画です。玄海原子力発電所がエリア内にあるグリーンコープ生協は、10年前から志を同じくする市民団体などと協力してプルサーマルを阻止するための取り組みを続けてきました。

グリーンコープ生協さが「玄海原発プルサーマル反対」の取り組み

2004年 3月	「2008年度までに玄海原発にプルサーマル導入」の新聞報道
2004年 6月	佐賀県知事、玄海町長にプルサーマル導入反対の署名提出
2005年 5月	「九電に『プルサーマルの説明』を聞く会」を開催
2005年 9月	九電に提出した質問についての九電による「回答の場」を開催
2005年12月 ~2006年 1月	「玄海原発プルサーマル これでも同意できますか」の新聞意見広告を佐賀新聞はじめ各新聞の九州版に掲載
2006年 2月 7日	佐賀県が玄海原発プルサーマルについて「安全判断」を表明
2006年 3月26日	佐賀県と玄海町が玄海原発プルサーマル計画の「事前了解願ひ」に同意
2006年 10月~12月	佐賀県に「県民投票条例」直接請求の署名活動
2009年 3月	地元有志による「NO! プルサーマル 佐賀ん会」を結成。さがも連帯して活動することを確認
2009年 5月10日	佐賀市で「5・10 人文字フェスタ」開催
2009年 7月 2日	「NO! プルサーマル 佐賀ん会」が九電に公開質問状を提出
2009年 8月19日	公開質問状に九電から回答

1997年、九州電力は正式にプルサーマルを玄海原発川内原発で行うことを表明。1999年、福井県高浜原発に日本ではじめてMOX燃料が搬入されました。同年、さがはプルサーマルに関する学習会を開催、それを機に、プルサーマル反対の取り組みをはじめました。署名活動や九州電力への質問、新聞意見広告など、10年間、精力的に運動を続け、プルサーマルの危険性、計画の無謀さや無意味さを訴えてきました。

現在、40万人署名に取り組み、9月の県議会に提出できるように準備をしています。MOX燃料の佐賀県到着を機に、市民の反対の機運も徐々に高まりつつあります。今年5月、佐賀市内で行われた「5・10 人文字フェスタ」には親子連れや大学生の姿も多く見られ、若い人たちの関心の高さがうかがえました。これらが正念場。佐賀県だけではなく、全国から反対の声をあげて、国や電力会社を動かす力にしていかなければなりません。

反プルサーマルの歩み

この間グリーンコープは、さがを中心としたプルサーマル反対運動に取り組みしてきました。グリーンコープ運動の主体は「地域」です。運動課題の一つである脱原発運動も、地域からの反対の声に呼応し、オールグリーンコープで応援してきました。

度重なる事故やデータの改ざんなどで、プルサーマル計画は破綻寸前のはずです。使用済みMOX燃料の処理方法も何も決まっています。にもかかわらず無責任な計画が強行されようとしています。このような危険なツケを、未来の子どもたちに負わせるわけにはいきません。さがでは、目の前に迫ったプルサーマル運動開始の阻止をめざして、もう一段運動の具体化を図っていくことにしています。8月19日には、事前に届けていた九電への公開質問状へ、回答が出されました。また、県庁へ申し入れも行いました。その内容は本紙11月号で報告します。

グリーンコープは、「脱原発社会」をめざします

未来の子どもたちに負の遺産を残さない



子どもたちの未来のために

No.14

原子力発電はこんなにも危険なのです

原子力発電所や核燃料工場の事故が他の事故と大きく違うのは、そのほとんどが“放射能の流出をとまなう”ということです。もちろん安全装置は多重に付いていて、たいいていの場合にはそれらが作動し大事故に発展する前に終息してきました。しかし、東海村の核燃料加工工場であるJCOでの臨界事故をはじめ事故は実際に起こっています。尊い命が奪われ、周辺住民はそこに住んでいるというだけで被曝を強いられました。放射線のエネルギーはとてつもなく巨大で、被曝量に安全基準などありません。大量に浴びれば即刻死に至り、微量でも長い年月をかけて人間の身体をむしろみ続ける恐ろしいものです。チェルノブイリ原発事故のような大事故が日本で起こらないという保障はどこにもなく、原発があるかぎり事故の不安がなくなることはありません。「原発にはたくさんの安全装置があるから安心です」と言われますが、たくさんの安全装置が必要であるのは、それだけ危険性が高いからなのです。

出典：「原子力発電で本当に私たちが知りたい120の基礎知識」 広瀬隆・藤田祐幸 著

グリーンコープ共同体組織委員会

言・い・た・い

投稿欄

グリーンコープ生協くまもと 廣岡 睦美

私の好きなグリーンコープ商品は産直びん牛乳。私の好きな...と言うより、わが家の息子たちの好きなグリーンコープ商品は、なんとと言っても、産直びん牛乳。現在4歳の長男が、牛乳を飲みだしたのは1歳くらいだっただろう。おしゃべりをはじめると「グリーンポークのぐうぬう！」と、冷蔵庫の前で催促。先月3歳になったばかりの二男の言葉は、まだ、たどたどしい。「ぐいんぽーくのゆうにゆう！」と1日に何回も。配達日に、兄弟2人で、びん1本の牛乳を飲みあげてしまうこともある。彼らがそのうち、きちんと「ぎゆうにゆう」って言えるようになったら、私はちよつとつまらないかもしれない。望みは、1月に生まれた三男に託そう。さて、三男はおにちゃんたちみたい、牛乳好きになるかな？グリーンコープの牛乳のことを何て呼ぶのかなあ？

投稿募集中

- 私の好きなグリーンコープ商品
- 400字程度 ●A切 毎月末
- 住所・氏名・年齢・TEL・所属生協名を明記して郵送またはFAX、Eメールでお送りください。掲載分には図書カード(500円分)進呈。
- 住所・氏名などの組合員の個人情報、本紙に掲載の場合のみ使用します。

〒812-8561 福岡市博多区博多駅中央街8-36博多ビル7F
グリーンコープコミュニケーション ワーカーズ連 (REN)
「共生の時代」編集部 宛
FAX 092-481-7876
Eメールアドレス rikoho@greencoop.or.jp

わが家の6歳になる長男です。普段は無口なサッカー少年ですが、台所でお手伝いを楽しくしてくれるようになりました。来年の小学校が楽しみです。グリーンコープ生協おかやま 原田 清子



お手伝いだいすき

とっておきの1枚

いま地域を考える

No.193

「食」から環境を考える



①2008年9月、大根の種と玉ねぎの苗の植えつけ
 ②左から野口さん、高山さん、吉田さん
 ③2009年5月、うどんづくり
 ④卵の生産者視察
 ⑤2008年12月、大根が収穫できました！
 ⑥平飼い鶏舎に「お邪魔しまーす」

「たべもの」の会(代表 井口隆史さん)は自然豊かな島根県松江市にある。「生産者と共に、食品公害にみちみちた現状を変革し、安全な食べものが継続的・安定的に誰にでも手に入るような仕組みを創り出すことを目的」に発足したこの会は、グリーンコープ生協(島根)とも連帯し、さまざまな活動をしている。事務局長の高山幸子さん、事務局員の野口朱美さん、吉田聖愛さん(グリーンコープ生協(島根)組合員)に話を聞いた。

「たべもの」の会

高度経済成長の中でさまざまな食品公害が表面化していた1975年。ほんものの食べものもなくなりかけていた。インスタント食品や加工食品が巷にあふれ、迫りくる飽食の時代を予感させた。そんな状況に危機感を抱いた人たちが発起人となり「たべもの」の会を立ち上げた。当時珍しかった無調整牛乳や平飼いの卵、有機野菜、丸大豆醤油など、生産者やメーカーに直接掛けあつて作ってもらい、皆で分けあい、配達や集金も発起人たちが担ってスタートした。工場や養鶏場に出かけ、生産者との交流を深め、援農や学習会も積極的に行った。食の問題だけでなく、原産や産業廃棄物問題、農薬の空

中散布など、時代や状況に応じたさまざまな問題に着目し、その是非を社会に問うてきた。「たべもの」の会は、その名称の平易さに似合わず、硬派の食べもの運動を展開し続けた。

問題意識を持ち続ける力

現在事務局長を務める高山さんは、幼い頃から身体が弱く「神経質で扱いにくい子」と言われ続けた。具合が悪くなり保健室に行くときさらに悪くなってしまう。「今思うと、薬品の臭いに反応してたんでしょね」。そんな高山さんは、会の共同購入で手に入れたものを食べはじめたから、みるみる体調がよくなった。「悪いものが身体から出て、純粋な状態に戻ったのだらう。化学物質に関する感覚が鋭くなりました」という。「たべもの」の会で学んで、自分が化学物質や電磁波に対する過敏症であることも知った。農薬の空中散布がある外に出られない人、化学物質過敏症の人や家電から発生する電磁波に過敏に反応してしまう人がいる。かねてより問題となっていた送電線や鉄塔から出る強い電磁波ばかりか、太陽光発電や風力発電の低周波音にも不調を訴える人がいることも無視できない。「大多数の人は平気なだけに分かってもらえない辛さがあります。ですが、こんな私だから、同じように苦しんでいる子どもや保護者の相談を受けることができます」。

自分の問題として捉える

「たべもの」の会の活動は、グリーンコープ生協(島根)と他2団体との共催で毎年開いてきた「農・食・医」を考える連続講演会に主軸を置いていた。第24回目になる今年度のテーマは、松江市の全小中学校での実施計画がすすむ「フッ化物洗口」の是非についてだ。フッ化物洗口は、急性・慢性毒性から反対の声が上がっている。「イヤなことばイヤ、変えられるものなら変えてみよう、そのためには知ること、行動することが大事」というのが皆の一致した考えだ。会として提起している問題を会員一人ひとりが自分の問題として捉えて動く。「昼食会や夕食会、新年会もこんな話題で熱くなれるのが「たべもの」の会です」と3人は笑う。しかし、一歩外に出ると「ねえ、この問題どう思う?」という問いかけに反応が少ないのも事実だ。

これからも地域に根ざして

会員には積極的に農業を体験しようという人や家庭菜園をしている人も多い。吉田さんは、グリーンコープ生協(島根)の理事と地区委員長を兼任しながら委員会の有志で野菜を育てて

問題を分かりやすく訴えられるよう、講演会のチラシや陳情書、要望書を何度も書き直す。「たべもの」の会の活動として、会員と共に学び、訴えることで、続けていくことができたという。

「たべもの」の会の活動は、グリーンコープ生協(島根)と他2団体との共催で毎年開いてきた「農・食・医」を考える連続講演会に主軸を置いていた。第24回目になる今年度のテーマは、松江市の全小中学校での実施計画がすすむ「フッ化物洗口」の是非についてだ。フッ化物洗口は、急性・慢性毒性から反対の声が上がっている。「イヤなことばイヤ、変えられるものなら変えてみよう、そのためには知ること、行動することが大事」というのが皆の一致した考えだ。会として提起している問題を会員一人ひとりが自分の問題として捉えて動く。「昼食会や夕食会、新年会もこんな話題で熱くなれるのが「たべもの」の会です」と3人は笑う。しかし、一歩外に出ると「ねえ、この問題どう思う?」という問いかけに反応が少ないのも事実だ。

2009年7月の組合員数 406278人 (7/27現在)

リユース リサイクル データ 2009年6月分

牛乳びん	リユースびん	トレー	モールドパック
回収本数 868,311本 回収率 97.8%	回収本数 195,992本 回収率 50.2%	回収重量 12,894kg 回収率 61.5%	回収重量 35,880kg 回収率 108.7%

(5月17日~6月13日回収分)

放射能汚染測定結果報告(190) 2009年6月

放射能汚染食品測定室検査。NDは、検出限界値(1ベクレル/kg)以下です。※は、グリーンコープ連合取り扱い商品です。

検体名	産地	セシウム134	セシウム137	合計ベクレル/kg
※ 梅	大分県	ND	ND	ND
※ 煎茶	福岡県	ND	ND	ND
※ はと麦ミックス茶	日本、中国、インド	ND	ND	ND
※ はぶ茶	インド	ND	ND	ND

忘れない。「たべもの」の会が発足して30年余り。2000人いた会員は、今では30人以上までに減った。パスタやライズ牛乳や平飼いの卵は「たべもの」の会でないとい手に入らない、という時代ではもうない。しかし、科学技術の発達の際で新たな問題が次々と生み出され、向きあうべきことは山積みされている。「たべもの」の会は、これからも、人と人とをネットワークしながら地域に根ざして広がり続けるだろう。

*1 虫菌予防のためにフッ化物(普通はフッ化ナトリウム)の水溶液を口に含み、30秒~1分間、歯をすすぐことをいう。一部の保育園、幼稚園、小中学校などで集団的に行われている。

*2 アニマルセラピーの中でも馬を使う療法。心身両面への直接セラピー効果が認められ、欧米では乗馬療法としてギリシャの時代から長い歴史を持つ